**小嶋善吉市長様との会見での**

**良くする会からの発言**

　きょうは市長さん、教育長さんを始め、職員の皆様、ご多忙のところ、貴重な時間を取っていただき有難うございます。私は「静岡市の図書館をよくする会」の代表を勤めさせていただいている草谷と申します。会の性格は、お手元の資料のように「図書館が好き」「図書館が大事」という思いだけで結ばれている超党派で立場を超えて活動しているグループです。時間がないのでご紹介はしませんが、市内の様々な会の方々の代弁者として私が文を読むという形でお話させていただきます。

　今日は図書館に指定管理者制度導入の検討を慎重にしていただきたいというお願いで伺いました。どうぞ、よろしくお願いします。

　その前に、まず、ここ10年くらいで急成長を遂げてくださった静岡市の図書館行政、図書館職員のがんばりに、市民として心からの感謝を申し上げたいと思います。

　正直なところ、一昔まえの静岡市の図書館は、全国の例にもれず、貸し本屋のイメージでした。図書館の地位も低くみられ、「図書館は市役所の中でも、仕事があまりできない人、身体の弱い人の異動の場」という噂も聞いたことがあります。それで、ますます図書館の印象が悪くなるという悪循環の時期もあったかに聞いています。

　しかし、今や、「情報を制するものが市場を制す」の言葉どおり、情報化、多様化、国際化の急激な時代の変化で、図書館は市民にとっても、行政にとっても必要不可欠な施設になり、行政の中でも最も大切なセクションとして位置づけられる時代になりました。また、情報格差が2極化した子供たちにとっても、読書や調べ学習の環境を整えることは、「学校にポリスをいれないためにライブラリアンを！」というアメリカでの合い言葉のように、大事な先行投資ともいわれています。

　そのことにいち早く気づき、古い図書館像を打ち壊し、新しい時代に即した図書館行政に力をいれてくださった小嶋市長さんや関係の皆様の先見性とご理解に心より感謝しています。 分館の設置、学校司書の配置。とりわけ、ビジネス支援をうたった御幸町図書館は、全国から見学者が訪れ、県内外から注目と関心を集めています。

　現在の図書館の頑張りは数字が証明していて、私たちが作ったパンフレットにも紹介していますが、個人貸し出し点数が、政令市14市の中でさいたま市につぎ、2位となっています。また、アンケート調査でも、市民への応対で満足度が高いという結果が出ています。さらに、貸し出し点数が30年の間に急速な伸びを示しています。他にもいろいいろよいサービスを提供してくれています。私自身も的確なレファレンスのおかげで、仕事上ほんとに助かっています。

　このように、長い時間をかけてようやく先進都市に近づいたという静岡市の現状を思うにつけ、せっかくここまで到達した静岡市の図書館サービスの水準を、下げないで欲しいと切に願っています。

　私たちは、指定管理者制度のことで、様々な立場の方の声を伺い、資料で勉強しました。その中で、いままで導入している自治体の図書館は、「もともと、よいサービスがなかった。」という事情があったと伺いました。また、「コンビニ並の人件費で職員の定着率が悪い」「図書館は利潤が出ない」「図書館に30パーセントあるという個人情報の扱いが心配」「継続した、専門性のある仕事の蓄積ができない」「受託したＮＰＯが人件費、労働条件の面で存続が大変。又、他の館との交流ができにくく硬直化しつつある」などの悩みがある事をお聞きしました。カウンターでの笑顔や入館者数は目に見える数字ですが、レファレンスや選書の方針、蔵書構成などの目に見えないサービスがおろそかにならないかも心配です。

　行革が必要な時代であることは充分理解しておりますが、「現時点でできることはないのか」「制度導入の前に、私たち静岡市民が望む図書館像とはどんなものか」をもう１度慎重にお考えいただければと思います。

　私たちも、自分たちにできることを考え、実現し、応援していきたいと思っています。また、パンフレットで提案しましたが、現在経験を積んだ有能な司書さんたちが、本庁に異動したまま戻ってこない例がたくさんあります。正規職員なみに頑張ってくれている臨時職員の待遇をよくすることも含め、専門職や図書館の仕事の経験者が、充分力を発揮できる体制を作っていただくことが何よりも効率のいいサービスに繋がるかと思います。お忙しいところ恐縮ですが、お渡しした資料にも、後で、お目をとおしていただければ幸いです。

　図書館のありようは自治体の文化レベルであり、また、図書館こそ、立場を超えて知恵を寄せ合ってよくしていくものでもあると認識しています。

　貴重なお時間をいただいた今日のこの機会が、そのためのきっかけになることを心よりお願い致します。お忙しいところ、気持ちよくお耳を傾けてくださり、本当に有難うございました。

　2005年12月12日